

「社会福祉入門」の試み

高橋 信行

1. 科目設立の背景－資格科目とキャリア教育のはざままで

近年、社会福祉教育において専門職養成教育は、その重要度を増している。特に、社会福祉専門職の国家資格である社会福祉士指定科目は、鹿児島国際大学福祉社会学部社会福祉学科において、ほとんどの学生に履修される科目群である。これらの資格科目群は、国家資格成立の中で、もともと4年生大学のプログラムから始まったと考えられるものの、実際には、4年生大学を想定したものというよりは、1年で履修が完了する「養成校プログラム」を基本としているために、4年間の中で学年ごとに科目を配置して、学生を育成していく大学プログラムとはやや趣を異にしている。

社会人としての基礎教養を治めている者が、資格取得を目的として履修しているというイメージである。よってそもそも初年次教育や導入教育などという概念はないし、学部教育の総まとめとしてのゼミ論等についての考えもない。

福祉系の4年生大学では、これら指定科目群を4年間のカリキュラムの中に配置するが、多くは3年までに履修が完了するようなプログラムが多い。

一方、近年の流れとしてキャリア教育や職業教育の必要性も叫ばれてきた。キャリア教育が学校教育の中で、取り上げられるようになったのは、1999（平成11）年の中教審答申「初等中等教育と高等教育の接続の改善について」や2004（平成16）年の文部科学省「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議」の報告であると言われている。（伊藤一雄他 2011:67）

そうした中、2006（平成18）年に教育基本法が改正され、教育の目標の一つとして「職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んじる態度を養うこと」が新たに盛り込まれた。この改正を踏まえた平成19年の学校基本法の改正においては、教育の目標の一つとして、「職業についての基礎的な知識と技能、勤労を重んずる態度及び個性に応じて将来の進路を選択する能力を養うこと」が規定され、また、高等学校の目的に「心身の発達及び進路に応じ」て教育を施すことが規定された。2008（平成20）年に策定された教育振興基本計画においては、地域の人材や民間の力を活用したキャリア教育・職業教育、ものづくりなど実践的教育の推進、専門学校等における職業教育の推進、学校・短期大学、高等専門学校、専修学校等における専門的職業人や実践的・創造的技術者の養成の推進等が掲げられている。（中央教育審議会 2011：15）

キャリア教育と職業教育の内容はどのようにとらえられるか。2011（平成23）年1月「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（答申）では、キャリア教育を、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」とし、キャリア教育は特定の活動や指導方法に限定される

ものではなく、様々な教育活動を通して実践されるものであり、一人一人の発達や社会人・職業人としての自立を促す視点から、学校教育を構成していくための理念と方向性を示すものであるとされる。職業教育とは、「一定又は特定の職業に従事するために必要な知識、技能、能力や態度を育てる教育」である。専門的な知識・技能の育成は、学校教育のみで完成するものではなく、生涯学習の観点を踏まえた教育の在り方を考える必要がある。また、社会が大きく変化する時代においては、特定の専門的な知識・技能の育成とともに、多様な職業に対応し得る、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力や態度の育成も重要であり、このような能力や態度は、具体の職業に関する教育を通して育成していくことが極めて有効である、と述べている。

そして、キャリア教育と職業教育の方向性を考える上での重要な視点を2点あげている。

- ① 仕事をすることの意義や、幅広い視点から職業の範囲を考えさせる指導を行う。
- ② 社会的・職業的自立や社会・職業への円滑な移行に必要な力を明確化する

この力に含まれる要素としては、「基礎的・基本的な知識・技能」「基礎的・汎用的能力」「論理的思考力・想像力」「意欲・態度及び価値観」「専門的な知識・技能」があげられ、基礎的・汎用的能力の具体的内容としては、「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」があげられている。(中央教育審議会 2011: 42)

一見するとこうした「キャリア教育」や「職業教育」の強調は、福祉専門職教育（ソーシャルワーク教育）と軌を一にしているように見えるが、現実には、そうでもなかったように思う。

本学では、1年生から社会福祉士指定科目が配置されているが、これらの科目がわかりにくいという声を学生から聞くことも多かった。基本的に学生の多くが、社会福祉士としての自己イメージがわからないのではないかと、つまり、自分たちの将来像がイメージできないという点が根本的にあるのではないかと感じるようになった。「養成校」の場合は、社会人として一人前の人たちが1年ですべての科目を履修するが、大学生の場合、高校からそのまま大学に行く学生が多く、実際に福祉現場に本格的に関わる実習は3年次に設定されていることも多い（本学もそうである）。その意味で、社会福祉専門職教育の中でも、「導入教育」、「初年次教育」に対応した科目の必要性を感じた。1年生には、将来自分たちがどのような職業人となって、福祉現場で活躍するのかというイメージをつけさせる教育が必要である。「余はいかにソーシャルワーカーになりしか」という専門ワーカーの語りが必要ではないかという思いに至ったのである。ⁱ

ⁱ 福祉専門職教育の中で、国家資格に合格することが主目的になり、学生にとっては就職の有利さでいうと、ワープロ検定で資格をとると同じような感覚で社会福祉士の資格をとっていく学生もだんだん増えてきたように感じる。このカリキュラムの中でソーシャルワーカーたちの語りを聴いた学生たちは「ソーシャルワーカーはずいぶん転職をするんですね」「今まで英語を学ぶ、数学を学ぶこととちょっと違いますね」などと述べる。ある種の驚きでもあるわけだが、社会福祉を学ぶ、ソーシャルワークを学ぶということは自分自身の生き方に直接かかわってくるぞと感じてきているように思う。

2. 科目の構成

筆者が担当する本講義は、もともと「社会福祉入門」（現「鹿児島社会福祉入門」）という科目名で2006年4月から開講した。当初は、オリエンテーションの後に、①外部講師6名の語り、②自分自身が福祉サービスの利用者となった場合の福祉サービスを理解すること、③援助技術の基礎を理解するという3つのテーマを持っていたが、現在、①の外部講師の語りと振り返りを軸に再編成している。

例えば2016年度における授業スケジュールは以下の通りである。

2016年度 鹿児島社会福祉入門スケジュール

	日付	内容	講師
1	4/15	1. 科目の特徴と今後のスケジュール	高橋
2	4/22	2. 社会福祉入門基礎講義 1	高橋
3	4/29	3. 社会福祉入門基礎講義 2	高橋
4	5/6	4. 語り1 テーマPSWと路上生活者支援 (レポート提出 5/6 から 5/19 まで)	鶴田啓洋氏
5	5/13	5. 語り1の振り返り	高橋
6	5/20	6. 語り2 テーマ地域福祉への道 (レポート提出 5/20 から 6/2 まで)	前田隆一氏
7	5/27	7. 語り2の振り返り	高橋
8	6/3	8. 語り3 テーマろう文化 (レポート提出 6/3 から 6/16 まで)	岩山誠氏 澤田利江氏 宮本真紀氏
9	6/10	9. 語り3の振り返り	高橋
10	6/17	10. 語り4 テーマ私が福祉を学んだ理由 ～“脊損”になって知った世界～ (レポート提出 6/17 から 6/30 まで)	坂元智香氏
11	6/24	11. 語り4の振り返り	高橋
12	7/1	12. 語り5 テーマ ノーマライゼーション、福祉との出会い (レポート提出は 7/1 から 7/14 まで)	伊東安男氏
13	7/8	13. 語り5の振り返り	高橋
14	7/15	14. 語りについてのまとめ	高橋
15	7/22	15. 補足	高橋

3. 科目の学習のポイント

この科目は、大学での専門職教育の導入教育としての意味を持つ。社会福祉教育が国家資格の取得を目的とした専門職教育に特化していく中で、4年間の中で段階的に教育を行う大学教育の特性があまり問題にされなくなった。このことは先にも述べた。その中で、入学したばかりの1年生にとって社会福祉専門職養成科目はとっつきにくい科目群になっていることも多い。この科目のシラバスには以下のように書いている。

社会福祉は制度として語るにしても、援助技術として語るにしても、そこにあるのは、人間たちの生活の営みである。社会福祉が複雑多岐になるなかで、それらをわかりやすく説明する講義の必要性が高くなっている。社会福祉を学ぶ学生が最初に受ける科目は、これからの社会福祉教育の道しるべとなり、またモチベーションとなるもの、エモーシナ

ルな面からも福祉に対する、強い共感の心を示すことができるものであるべきである。授業全体の内容の概要としては、社会福祉の基礎を学ばせることを目的として、単独講義ではなくオムニバス形式をとりながら、①. 福祉援助者や利用者の語りを中心とした学び、②. 自分自身が福祉サービスの利用者であることを想定した場合の利用法、③. 対人援助の基礎の理解の3点に焦点をおいて授業を進める。[授業修了時の達成課題（到達目標）としては、なにより社会福祉専門職として、今後の学びを行うスタートラインに並ぶことが主眼である。そのためには、知識として福祉制度の断片的な理解をするよりは、福祉とは何か、福祉援助者はいかに行為しているかという点を理解し、今後ともこうした専門福祉科目を学びながら、援助者としての自分を覚知させることを目標としている。

4. 講師の役割

この授業での講師の役割は、キャリアをつんだ専門職の立場から、その生き様を明らかにし、今後学生たちが専門職として成長していく場合の、乗り越えるべき課題や最終的な到達点をモデル的に提示していくことである。そのため一定のキャリアを積んだ福祉専門職を講師に迎えている。ただもう一点、当事者の立場から福祉を語るという点を加味している。5つの語りのうち2つの語りは当事者としての視点を含む講師の話である。ただし、単に当事者ということにとどまらず、援助者としての支援も併せ持つ講師を配している。全体的に年齢は20歳代から70歳代まで多岐にわたっている。学生にあらかじめ示している講師のプロフィールは以下の通りである。

講師プロフィール（平成2016年度）学生に提示しているもの

日程	氏名	プロフィール
5/6	鶴田啓洋氏	PSWとして病院等でソーシャルワーカーを経験後、現在はNPO法人やどかりサポート鹿児島に所属し、障がい・貧困等の社会生活上の困難を抱え、自立した生活を阻害されている人々に対し、低廉な利用料で賃貸住宅への入居を支援し、社会的に孤立することなく生活できるよう援助を行っている。精神保健福祉士、社会福祉士。
5/20	前田隆一氏	大学時代からハンセン病問題等の福祉活動に積極的に関わり、その後、九州内で、医療ソーシャルワーカー等福祉関係のさまざまな仕事に就かれる。現在、宮崎県小林市社会福祉協議会、地域包括支援センターセンター長として、地域福祉活動で活躍されている。本学大学院を修了された社会福祉士でもある。
6/17	坂元智香氏	昭和57年健康優良児で生まれたが、15歳の時に事故により「第6胸椎圧迫骨折、第8及び第9胸椎破裂骨折による脊髄損傷」と診断される。平成10年身体障害者手帳取得（1種1級）、車いすでの生活を送っている。平成17年に本学卒業後、県内の福祉施設に就職。現在、大分銀行太陽の家支店勤務 社会福祉士
6/3	岩山 誠氏	自身がろう者で鹿児島大学在学中にデフNetの前身であるデフスクールで活動しており、その後厚労省入職を機に出身地である東京に戻っていた。2013年、鹿児島大学大学院博士課程で学ぶため休職し、2014年ダスキン障害者リーダー育成事業の研修派遣生となり1年間イギリスで障害者の就業、聴覚障害者の支援体制などを学んだ。現在は、NPOデフNet. かごしまに所属している。
6/3	宮本真紀氏	ご両親がろう者（=CODA<コーダ>）で、手話通訳士として活躍され、各大学等の非常勤講師としても手話指導をされている。1999年NHK番組（主に「ろうを生きる難聴を生きる」「みんなの手話」）に手話通訳として携わっておられた。映画では2006年公開「着信アリ Final」手話通訳、2007年公開「きみにしか聞こえない」の手話指導もされている。現在の所属は、デフNet. かごしま。

6/3	澤田利江氏	ろう児・難聴児の放課後等デイサービス事業「デフキッズ」、また、ろう者・ろう重複者の働く場所を提供する就労継続支援B型事業所「ぶどうの木」、手話クラスを運営するNPOデフNet. かがしまの理事長。自身がろう者である澤田氏は教員資格を生かしてろう児・ろう者をサポートする仕事がしたいと、この世界に入った。「デフキッズ」では、ろう者スタッフ・聴者スタッフのもと、様々な体験を通して子供たちの健全な成長をサポートし、またろう者・ろう重複者の働く場所づくり、生きがいづくり、そして一方では聴者対象の手話クラスにより手話の普及を目指すなど多様な支援を展開する。鹿児島市障害者相談員（2012～）、2013年度・鹿児島県「障害のある人もない人も共に生きる鹿児島づくり条例」検討委員会の公募委員。
7/1	伊東安男氏	旧始良町町議を経て保育事業その他、種々の社会福祉分野で活躍、特に高齢者デイサービスと保育所との統合事業など、福祉の新しい流れを作る開拓者でもある。社会福祉の起業家精神をもったノーマライゼーションの実践家であり、その原動力には人間に対する深い愛情が根付いている。社会福祉法人建昌福祉会理事長。社会福祉士。

5. ICTの活用の仕方

現在、この授業においては、出席記録だけでなく、さまざまな形でICT技術を利用している。

(1) 講師の語りについてのレポート

この授業では5人の講師の語りについてのレポートを5本求め、これらを学生ポータルレポート機能を使って提出させることとしている。この5本のレポートは学生の成績評価の中心である。このため、学生ポータルを使ってレポート提出ができない者がいないように、第1回目の授業の折に、練習用レポートの提出を求め、翌週には提出方法のわからない者を想定して、手順を写真で示し、それでも提出ができない者については、3週目の授業終了後、個別に指導をして、レポート提出のできない者がいないように教育をしている。

(2) 講義ビデオによる視聴

授業を欠席し、外部講師による講義を聞けなかった者に対しては、外部講師の講義内容をビデオにとり、学生情報システムのeラーニング内に、資料とビデオ映像をアップし、講師の講義内容を視聴できるようにしている。

6. 授業内容と成績評価

現在、外部講師の語りを中心に翌週にその振り返りを行うことをメインにおき、はじめの3回は、オリエンテーションと社会福祉に関する導入的な講義を、そして終わりに2回は、講師全体の語りの振り返りと総括に使っている。

当初5人の講師の話は、続いて行っていたが、学生からの声として、毎週のレポート作成はきついという話があったのと、5人の講師の話聞きっぱなしにするよりも、彼らの話を振り返りながら、話の中で出てきた事柄を深めるために1コマを使うべきだと判断したことによる。ここでは、5人の講師の人となりと語りの内容に簡単にふれてみる。講師の話は基本的には、毎年同じ話をしてもらっているようにしている。

学生は、これらの講師の語りに対して、レポートを提出することが求められる。レポートの条件としては、前半に講師の話の振り返り、後半で自分自身の意見や感想を述べると

いうスタイルである。単に自説を述べるだけでなく、講師の話を受け止め、要約した上で、自分の意見を求めるものである。これは先々、3年次に設定されている実習ノートの記述が、客観的出来事の記述と自分自身の意見や感想を述べることを区別しているところと共通している。

ここでは、学生のレポートを示すことで講師の話の内容を振り返り、また学生がどのように感じたかを見ることとする。

語り1 テーマPSWと路上生活者支援 鶴田啓洋氏

鶴田啓洋先生の講話を聞いて

第1回目の講話は、NPO法人やどかりサポート鹿児島島の鶴田先生のお話だった。先生は鹿児島国際大学で福祉を学び、ある先生の実習指導に行くための運転手のアルバイトをしたことで直接福祉に触れる機会があり、その中で体験に感銘を受け福祉の道へと進んだ。大学卒業後、医療ソーシャルワーカーとして1年間勤務した。鶴田先生は医療ソーシャルワーカーが起用された年に採用され、病院側も鶴田先生自身も何をすればいいのかわからなかった。そのため、はじめは受付に立ち、受付の仕事をすることで医療事務を学んだ。しかし、このままではいけないと理事長に直談判して、経済困難者の話をきいて解決方法を探るといった内容のソーシャルワークを自力で始めた。しかし、その当時、病院には相談専用の部屋が確保されておらず病院の公用車の中で面接をするという、今では考えられない状況で面接を行っていた。その後、鶴田先生は自分からクライアントに出向くアウトリーチを開始した。その後、精神科での勤務のオファーがあり、12年間精神科で勤務をしていた。鶴田先生が着任した当時、精神科には30年から50年近くも入院している長期入院者が大勢おり、衝撃を受けた。長期間に及ぶ入院により人生を奪われた長期入院者を地域に戻すことを目的に平成8年に精神保健福祉士が資格化された。鶴田先生も精神保健福祉士の資格を取得し、長期入院者の退院をめざし活動した。しかし、鶴田先生は初めて関わった長期入院者の女性に会い衝撃を受けた。30年間入院していたその女性は鶴田さんに対して「来ないで！帰って！」「今、私の幸せはここ(病院)にある。」と言い放ったのだ。長期入院での30年はその女性自身を変えてしまったのだ。このことを人権侵害だと考えた鶴田先生は長期入院者が退院し、自立した生活を送れるようアパートを借りる上での保証人サービスを行い、支援を行った。その結果、保証人サービスの利用により、生活を送れる人が増加した。

また、鶴田先生はホームレス生活者の支援ボランティアも行う。ボランティアを行っていく中で出会った男性の「飢えほど苦しいものはない。盗むか死ぬかしか考えない。」という言葉から、まず飢えをつくらないということから週3回の炊き出しを6~7年間行っている。炊き出しのほかに医療サービスや生活保護決定までのシェルターの貸し出しなども行っているという。また、簡単にホームレスと名詞で呼ぶのは日本だけで、鶴田先生は、ホームレスという人はおらず、何らかの事情で住むところを無くしただけであり、その人の人生があるとおっしゃっていた。

鶴田先生のお話は、私がこれまで考えていた福祉を大きく覆すようなものだった。長期入院者の生活のために保証人になり、ホームレス生活者のために週3回というほかの県のどこよりも多い回数の炊き出しを行う。生活困難者の困難の理由をとことん考え、自分の身を粉にしてその理由から無くしていこうという考えと行動力には感銘を受けた。

「実はボランティアは何でもできる。」という言葉聞き、自分の中でボランティアという活動内容が固定化されていたことに気付いた。ボランティアは決して決められているものではなく、支援を必要としている人の立場に立ってみるとたくさんあるのだ。私はまずは、実際にボランティアの現場に赴き自分の目から福祉を考えることから始めたい。

語り 2 テーマ 地域福祉への道 前田隆一氏

経験の大切さ

今回、前田隆一さんのお話を聞いた。前田さんが社会福祉学を専攻したのは、障がい者であった祖父母の存在が大きく、不自由なのを見ていたため、人を援助する仕事がしたかったからだという。そして、大学での先生との出会いで市民と権力、社会という視点について話して下さった。そこで定義を大事に、自分がぶれないようにと話された。また前田さんが参加されていた点字サークルでの障がい者解放運動に関わっている先輩との出会いや、自立生活をされている障がい者へのボランティアで出会った方の話をしてくださった。視覚障がいと下肢障がいのBさんは地下鉄のホームに落ちて両足を切断することになってしまったらしく、前田さんはこの社会はJRやバスなど、バリアだらけの社会だとおっしゃっていた。

次に、当時はらい病などとも呼ばれていたハンセン病について詳しく教えて下さった。前田さんがハンセン病の方々との出会い、関わっていくなかで知った強制隔離収容や強制労働、断種、懲罰など様々な問題について教えて下さり、当時のハンセン病問題を差別問題としてとらえる見方に、個人と個人のお付き合いから始めて、知らない人に伝えることが大事ではないかと考えたと話された。韓国学生とのワークキャンプについても聞かせて下さった。

前田さんは大学卒業後、精神医療ソーシャルワーカー、医療ソーシャルワーカー特別養護老人ホームで生活指導員などとして働き、働くなかで学んだ様々なことを教えて下さった。また社会福祉協議会や地域包括支援センターで経験したことや支えあいマップやその研修会、これからやろうとしていることについても話して下さった。

最後に、前田さんは社会福祉援助職を職業とすることについて、他人の人生に関わるプロとしての責任や謙虚な気持ちで、まず小さなことから始めるなど基本的なことから、転職は勧めないが前田さんの場合は学ぶことが多かった、無駄なことはないのでその都度一生懸命にやるといった、前田さんの経験をもとにしたアドバイスもして下さった。

私は前田さんの話を聞いて、まず前田さんの経験の豊富さに驚いた。大学時代からサークルを通して障がい者の方や障がい者問題に取り組んでいる人との関わりを持っていたということに驚き、また自分もそのような方々と直に接してみたいとも思った。また私たちの年代にはほとんど馴染みのなくなってしまうハンセン病について詳しく知り、実際にハンセン病にかかった人と関わった前田さんの話を聞くことができたのはとても貴重だと思う。相談職や介護職などどの職業においても、関わるのは自分と同年代の人だけではない。今のうちにほかの年代の人についてもっと理解を深めておきたいと思った。

前田さんのお話は、前田さん自身が経験したからこそ話せる内容というのが多く、改めて経験することの大切さを実感した。自分から行動するボランティアも大切な経験だが、先輩や今現役で働いている人の話を聞くのも大切な経験だと思うので、自分からいろんな人の話を聞きに行きたいと思う。

語り 3 テーマ ろう文化 岩山誠氏澤田利江氏宮本真紀氏

岩山誠先生、宮本真紀先生、澤田利江先生の話を聞いて

今回、岩山先生・宮本先生・澤田先生の話聞いた。まず、澤田先生によれば澤田先生自身がろう者であり、企業で8年間働かれたが、ろう者をサポートする仕事がしたいと思い、現在はNPO デフ Net. かごしまで働かれている。このNPO デフ Net. かごしまを立ち上げられたきっかけは、以前はろう者に対する差別が多く、鹿児島にろう学校があまり無かった事だという。理念としては、ろう者・聴者お互いが認め合い、互いを尊重し共生する社会を目指すものである。ろう文化では、感じ方・言いまわし・お互いの接し方の3つが大切である。デフ Net. かごしまの事業内容にはJSL かごしま手話クラスがある。手話クラスは少人数制クラスで手話通訳の技術を高めたい方のためのクラスや翻訳クラスもあるそうだ。澤田先生が仕事を通じて気づいたことは、障がいに関係なく人にはそれぞれ潜在能力があるということ、障がい者の背景・心理を理解することである。

次に、岩山先生の話聞いた。岩山先生によれば、全国に550ヶ所もあるハローワークにもかかわらず、聴障者が岩山先生に相談に来るそうだ。その背景には、激安に対する障がい者の不安があるという。いろいろな問題を抱える障がい者を分析し、イギリスでの学びを活かして支援しようとされている。岩山先生が考える非障がい者の援助者に求められることは、自分の知識や理解面などの限界を知ること、共感力を磨くこと、団体と連携する視点を持つことである。

私が澤田先生、岩山先生の話聞いて思ったことは、人に対して同情ではなく共感することが大事だということである。澤田先生から、聴覚障がい者にも様々なひとがいらっしゃるということを知った。また、手話にも日本手話と手指日本語があるということを知った。私は以前まで名称しか知らなかった為、今回の講義で意味を知ることができ良かった。さらに、デフ Net. かごしまはろう者の方々がありのままでいられる場所でもあるということに気付いた。そして、私は先入観をなくしエンパワメントを大事にしたいと思った。障がい者が持っている力を引き出し、共に成長し共に幸せになるような支援を目指すべきだと思う。

岩山先生の話から、学んだことは、ハローワークについてである。従来のハローワークは、援助者が非障がい者で相談者が障がい者であった。しかし、新しいタイプのハローワークは援助者・相談者共に障がい者であることだ。同じ立場で話すことができるので、より相談者の心に響くと思った。その初めてろう者で職員になった人が岩山先生であることに驚いたとともに、全国から岩山先生に相談に来る人がいるということはそれだけ信頼されているのだと思った。職場での非障がい者の発言が障がい者を苦しめていることを知った。私が感動したことは、岩山先生自身がイギリスへ行き障がい者支援について学ばれたことである。自分の目で確かめ、日本にどう取り入れていくか考える大切さを改めて感じさせられた。さらに、将来私が障がい者を支援する仕事に就くならば、障がい者のことをきちんと理解し、共感力を磨きたいと思う。また、当事者団体との連携でさらに良い支援ができるように考えていきたいと思う。

語り 4 テーマ私が福祉を学んだ理由 ～“脊損”になって知った世界～坂元智香氏

坂元智子先生の講話を聴いて

坂元先生は生まれた時から障がいがあったわけではなく、15歳のときに事故にあい、脊椎を損傷し胸椎を部分断裂した。胸椎の断裂により歩けないだけでなく尾椎の機能が衰え我慢などができなくなり、排せつ障害になってしまった。それでもリハビリをすれば歩けるようになると思いリハビリに励んだが一向に歩けるようにはならず、今までできていたことができなくなった現実を受け止められず、誰とも話せなくなってしまった。そんな中一人のメディカルソーシャルワーカーの女性と出会った。なんでも話を聞いてくれ、頼れる人に出会えたことで楽になり吹っ切れ、自分がやらなければならないことを探すようになった。女性は実家の改修のために作業療法士を紹介してくれたり、学校に戻りたいという願いをかなえるために通信制の学校を調べてくれたりしてくれた。坂元先生は健常者から障がい者になった経験を生かしたいと思うようになった。

現在わたしたちが習っていることや今から習うことは国家試験だけでなく、将来の福祉の仕事につながっている。サービスを提供していくうえで知らない適切なサービスを利用者に紹介できない。人によってケースはいろいろでいろいろなことを想定し、1つのケースで何が必要か考える練習が必要である。

坂元先生が大事にしてほしいと思うことは人の話をよく聞くこと。相手の話を今までの人生からこういう考えを持つのだとイメージして聞き何を訴えたいのか読み取ることができるようになるために、いろいろな人と話をするなど自分から経験していくことが大切で、その人がその人らしい生活がするための援助ができるようにならないといけない。

坂元先生の話の中に社会福祉士の仕事の例があった。具体例をあげ、利用者さんにどうやった接し方をすればいいのか、利用者さんだけでなくその家族のからの相談や悩みもあり本人のケアと家族の心理的なサポートが必要なことや入院中だけでなく退院後の住居、仕事などの今後の生活、サービスのことなど、今の勉強していることや今から勉強することでどの場面でどの知識が役に立っていくのか具体的に知ることができた。高校までのどこで役立つかわからない知識よりも強いイメージが持てたことで大事なことは大事なのだと思えた。また、質疑応答の中で坂元先生は「手伝ってあげようか」より「なにか手伝うことある？」のほうがうれしいと言っていた。私の小学校時代からの友人に身体障がいをもつ友人がいるが工夫してなんでも器用にしていたことを思い出し、もしかしたらそれが1番大切なことなのかもしれないと思った。

語り5テーマ ノーマライゼーション、福祉との出会い 伊東安男氏

福祉の統合教育を目指した活動を聴いて

社会福祉法人健昌福祉会の理事長を務める伊東安男氏の話の聴いた。伊東氏は、37年前、マイナスのスタートから保育園を建ち上げ、そこで、障害児を持つ母子家庭と出会った。障害児が「みんなと同じ学校にいけない」という一言に衝撃を受け、それをきっかけに通信制の大学で福祉を学び、卒業後は保育園併設の老人福祉施設「さざんか園」を建ち上げ、3世代交流の場を復活させた。

伊東氏は、現在の児童における社会問題の中で、少子化・待機児童・児童虐待・障害児の問題に注目する。現在、少子化にも関わらず、女性の出産後の社会進出が原因で、保育者のニーズが増加し、待機児童が問題化している。伊東氏は、それに対応するために、認定こども園という保育園と幼稚園の統合施設を作った。また、平成6年から、5年間、主任児童員として子どもたちの訪問や子どもたちと老人ホーム・障害者施設でボランティアを行った。しかし、まだまだ多くの課題がある。父子家庭の子育て問題やこどもたちの福祉・看護における体験不足。偏差値重視の社会からは、当たり前のマナーを守ることができない子どもが増加している。また、大人の社会の乱れが、子供の非行や貧困につながっている現状がある。

障害児・者の面では、伊東氏は、カリフォルニアのサンタローザでの統合(交流)教育に影響を受け、障害者支援の限界に立ち向かう。他にも、ボランティア問題・高齢者問題・生活保護問題など、地域福祉のすべての分野に目を向け、課題解決へと行動している。

伊東氏の話の聴いて、保育園と老人福祉施設の統合事業は、新たな明るい日本を作り、日本最大の問題である少子高齢化問題の改善に、大きく貢献するのではないかと考えた。

私事ではあるが、私の母は、習字教室で子どもたちの指導をしながら、老人ホームでお年寄りの方々に書道の楽しさを教えている。母が、「いつか、子どもとお年寄りが一緒に活動できる施設を作りたい。」と私に夢を語ってくれたのを思い出した。まさに、伊東氏は、それを実現し、地域ぐるみの3世代交流まで可能にした。立場の弱い子どもたちを虐待や貧困のサイクルから守ることは、様々な体験やボランティアを一緒に行うこと、児童・高齢者・障害者の交流が当たり前になる地域福祉の実現である。資料5のボランティアの真髓からは、単に「ボランティア活動」という言葉を意識するのではなく、活動者と患者の間に生まれる「心と心の寄り添い合い」に目を向けることが大事だと考えさせられた。

私は現在、介護福祉コースで高齢者分野を学んでいるので、今回の講義で児童や障害児・者の分野の現状と課題について、新たな視点で知ることができた。福祉は、児童・障害者・高齢者問題を一つ一つに注目して見がちだが、それらをすべてつなげて考え、地域全体で改善していくことが重要である。伊東氏の話からは、すべてつなげて課題を克服することが可能であると実感することができた。私も、子供たちが小さな体で抱える大きな問題を共に寄り添いながら救える人になりたいと思った。そのためにも、私たちが4年間で様々な事を体験し、多くの人と触れ合いながら、相手の気持ちに優しく寄り添い、「よい聞き手」になる必要がある。今回は、福祉全体を広い視野で見ることができ、私にとって、とても刺激的な内容の講義だった。

学生の成績評価は、5本のレポートと平常点から100点満点で示す。平成28年度の履修者は、100名 このうち再履修者が20名となっている。ⁱⁱ

またこの科目の授業評価は筆者の担当する科目の中では最も高く、学内授業アンケートでは、平成28年度で総合満足度4.41である。これは所属学科平均4.16や全体平均4.23よ

ii 社会福祉入門Ⅰから鹿児島社会福祉入門へ

そもそも、この科目は選択科目社会福祉入門としてスタートしたが、途中、社会福祉入門Ⅰと名称が変更になり、この時に、後期科目として社会福祉入門Ⅱがスタートしている。その折りに、この科目は実習にいくためには、履修しておかねばならない科目とされた。

社会福祉入門Ⅰは、平成28年度からの新カリキュラムの中で廃止され、実質的にこの科目は、再履修者を対象にするだけの科目になったが、同年立ち上がった鹿児島社会福祉入門を筆者が担当することになり、内容的に社会福祉入門のカリキュラムをそのまま用いたために、社会福祉入門の科目は、名前は「鹿児島社会福祉入門」になったものの、科目内容は維持された。

りも高い。

7. 課題と対応策

(1) 他の科目との連携

実は数年前まで、この科目は、新入生ゼミナールの担当教員にレポート内容を送付し、ゼミナールの中でのレポートの書き方の指導や生活相談に役立てていた。レポート作成能力の劣る学生に対して、個別指導を行うことが難しい現状の中で、新入生ゼミナールの活動を通して、そうした指導ができればよいだろう。現在は、そうした連携が行われていないのは残念であるが、講義を主体とした社会福祉入門にアクティブラーニングの要素を持たせる意味でも、新入生ゼミナールとの連携は重要ではないかと思っているところである。

(2) 谷間の時間の対応

外部講師の語りを2週間に1回にし、よく週は講師の話の振り返りを行うことはよかったと思うが、主観的には、この谷間の授業の出席率が今ひとつ少ないような気がしていた。(今年度の人数の変化を調べた限りは、そうした点は確認されなかったが)

しかし現在のあり方では、この谷間の授業の事前事後学習は、十分担保されていないために、今後の対応が必要である。次年度よりは、レスポンスシートを使って、学生ポータル上でレポート提出の機会をつくらうと考えているところである。

(3) ICTの活用

本授業での講師の語りをレポートにする方法は、学生ポータルの仕組みを利用しなければ困難であったろう。レポートチェックもしやすいし、レポートを出した、出していないということで学生とトラブルになることもない。ただ時折規格外のファイルを添付してくる学生がいるので注意が必要だ。レポート作成能力の極端に劣る学生に対しては、別の指導の仕組みを連動させることが考えられる。

講師の語りの時間に休んだ学生には、以前であれば、録音したCDを貸したりということもあったが、現在は、ビデオを学内ランの中に、アップし、その時欠席した学生もビデオ映像でレポートを書くことができるようにしている。

公益社団法人 私立大学情報教育協会が実施した「平成28年度私立大学教員の授業改善に関する調査」では、授業改善のためのICTの活用方法・内容についての質問が含まれており、「授業内容の可視化」「事前・事後学修」「授業方法の改善」「大学間・産業界・地域社会との連携」「学修成果の点検・評価・改善」の活用項目にそって全部で16の具体的な項目が示されている。これらの項目は、今後の授業改善の参考になる。

(4) レポートの評価とループリック

本授業評価の柱はレポートであり、レポートには講師の話の要約と自分の意見を書くよ

うに指導をしているが今後、レポートの評価基準をルーブリックの形式で示すことを検討中である。

(5) 事前、事後学習のあり方

上に述べたように、レスポンスシートを「事前・事後学習カード」として、学生に書いてもらい、学生ポータルレポート機能を使ってそれを提出してもらう予定にしている。ただ講師の講義資料は当日になることもしばしばあり、事前学習については難しい場合もある。

事前・事後学習カード (科目名)			
			日 付 _____
学年	組	学生番号	名前

事前資料-	1. ダウンロードした 2. ダウンロードしていない		
※どちらかを囲む			
<u>事前資料の感想-</u>			
授業の振り返り-授業内容	1. だいたい理解できた 2. あまり理解出来なかった		
※どちらかを囲む			
<u>授業での感想-</u>			

(6) 受講生への合理的配慮

① 講師の話の要約

聴覚に障害のある学生にとって講師の口頭だけの語りは、十分に受け止めがたいものである。そのため、講師の話をあらかじめ、要約文にまとめ、これに沿って話を進めて

もらうようにしている。要約文は必要な学生に配る。

② ビデオ受講の配慮

ビデオによる受講に関しても、できるだけ字幕スーパーのあるビデオを使用するように考えているが、教室環境もあり、字幕での映像を提供できない場合もある。その場合は、必要とする学生にパソコンを使って字幕付きビデオをみてもらうなどの対応をおこなっている。

しかしまた、さまざまな障がいをもつ学生に対する対応としては、まだまだ改善すべき点はあると思われる。

(7) アクティブラーニングの視点

講義を中心にした知識伝達型の授業の教育効果が問題視され、学生のより主体的な授業形態－アクティブラーニングが提唱されている。この科目に関しては、能動性という点で言えば、レポートの作成を主眼としている点があげられるが、PBLといった問題解決型を志向しているわけではない。講師の話をもとめたり、自分の意見を述べる以外にも、学生同士の討議を取り入れたり、あるいは具体的な福祉課題についての解決策を考えるプログラムも想定されるが、今のところ、導入教育として、社会福祉援助者イメージの具体化という点を中心にカリキュラムを展開している。

(8) 導入教育としての意味

本科目は社会福祉学科の学生の1年前期に設定されている点から、社会福祉専門教育の導入的な意味合いを持っており、語りの中に出てくるテクニカルタームや制度についての理解が不自由のまま終わっても、2年、3年と経ていくうちにより正確な概念理解ができるようになるであろうという想定もある。自己の宿題として考えて行ければいいと思うが、社会福祉やソーシャルワーク、専門職への関心につながるということが重要であると思っている。その意味で、他の専門科目との連動性や連携が、これまで以上に必要であると考えている。

文献

伊藤一雄、佐藤史人、堀内達夫『キャリア開発と職業指導－大学・高校のキャリア教育支援－』
法律文化社 2011

中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」(答申)ぎょうせい 2011年